８１期岡山労働学校　第６講義

資本主義を生み出す力となった思想・世界観　その２

２０１１．６．１６

岡山県労働者学習協会　長久啓太
ブログ「勉客商売」　http://benkaku.typepad.jp/blog/

≪前回の第５講義のふりかえり≫
①禁欲主義からルネサンスへ。いろいろあるけど、人間っていいよね！という思想
②レオナルド・ダ・ヴィンチをはじめ、巨人を生み出した時代
③コペルニクスの地動説は、教会の権威と世界観を根底からくつがえす意味をもった
④真理を求めて、当時の常識とたたかった人がいた。そして、新しい常識がつくられた。

一。唯物論的要素のさらなる前進

「哲学者たちは、デカルトからヘーゲル、またホッブズからフォイエルバッハまでの、この長い期間にわたって、けっして彼らが信じていたようにただ純粋な思考の力によってだけ、かりたてられていたのではない。それと反対である。彼らを真にかりたてていたものは、とくに、自然科学と産業との強力な、しかもますますその速度をましながら突進する、進歩であった」
（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

「ヨーロッパが中世から抜け出した時に、都市の新興の中流階級はその革命的要素を構成していた。この階級は、中世の封建的組織のなかで公認の地位をたたかいとっていたが、この地位はまた、この階級の膨張力にとっては余りにも狭くなっていた。中流階級、すなわちブルジョアジーの発展は、封建制度の維持と両立しなくなった。したがって、封建制度は倒れなければならなかった」
（エンゲルス『空想から科学へ』英語版への特別の序文）

１。フランシス・ベーコン（1561 年～1626 年）―「**知識は力なり**」
◇英国の哲学者、法律家。

＊マルクスは、ベーコンを「イギリスの唯物論とあらゆる近代の実験諸科学の真の祖先」「唯物論の第一の創始者」とよんでいる（『聖家族』）
＊先入観となっているさまざまな偏見から頭を解放せよ、そして忠実に自然を観察し、自然を「通訳」せよ。真実に到達するためには、何よりもまず経験を重視せねばならない。
＊実験的行為がまだ魔術的ともつかぬ時代にあって、科学の立脚点に実験をすえたところに、ベーコンのすごさがある。
＊物資を生きたもの、運動するものとしてとらえ、物質の無限の可能性を花開かせるものとして科学・技術・産業にかぎりない信頼をよせ、それを人類の幸福のために活用するべきと主張した。

◇ベーコンの夢 ―― 『ニュー・アトランティス』（1627 年）

★「サロモンの家」での実験と研究ー人々の幸福のためにこそ知識と技術を

・「洞窟」では、諸物体の凝固、硬化、冷却と保存。合成物の貯蔵。新しい人工金属の生産。病気の治療にも。
・「高い塔」では、日光乾燥、冷却、貯蔵。大気現象の観察。
・「淡水、塩水の湖」では、魚類、鳥類の生育。塩水から淡水を。淡水から人工的に塩水を。急流と滝は多くの動力に活用。風力を倍加し、強化してさまざまな運動をひき起こすための装置を配置。
・「人工の井戸」では、浄水や健康維持の水を開発。
・「広壮な館」では、さまざまな大気現象、雪、雹（ひょう）、雨、水ならぬ液体の雨、雷、稲妻等を人工的に作り出す。蛙、羽虫、などを発生させる。
・「健康室」では、病気の治療と健康の維持のために空気を調節する。
・「清潔で広い浴場」では、その水に数種の成分を溶かして、病気を治療し人体の水分欠乏を回復させる。
・「種々の果樹園、菜園」では、あらゆる植物実験。木や花が（人工的に）季節よりも早く、あるいは遅く芽生え、自然の速度よりも早く成長し、実を結ぶようにしたり、手を加えて自然よりはるかに大きく成長させ、より大きく、甘く、天然産とは異なる味、香り、色、形の実を結ばせる。薬用にも活用。
・普通種とは異なる新種の植物を作ったり、ある草木を別種の草木に変える術を知っている。
・「あらゆる種類の獣、鳥のための園と檻」では、解剖と実験が行なわれ、人体にどのような処置を施すことができるかの理解をすすめる。さまざまな医学的成果を得る。異種間の混交、交配の方法を知っており、すでに多くの新種を得ている。
・「優れた特別の効能を持つさまざまの飲料、パン、料理を作る醸造所、製パン所、厨房」
・「薬局」
・「工芸」
・「炉」
・「光学研究所」
・「音響研究所」
・「香料研究所」
・「動力研究所」
・「数学研究所」
・「錯覚研究所」

＊この時代の技術水準に拘束されることなく、自由な想像力で。しかも理論的な可能性は十分考慮して。
＊ベーコンは、こうした実験や研究をすすめる科学者集団の役割分担まで言及し、さらに、そうした自然科学者は、自らの実験や研究の成果の結果がどのようなものをもたらすかの善悪の判断をくだすことのできる賢者でなければならないということをこの物語で表現している。

2。ルネ・デカルト（1596 年～1650 年）―「**われ思う、ゆえにわれ在り**」

＊フランスでは、ブルボン家による絶対君主制が、ブルジョアジーとの妥協によって維持されながらも、しだいに資本主義経済が育成されつつあった。

◇フランスの哲学者、自然科学者

＊科学の面でいうと、ガリレオからニュートンへの橋渡しをした人。地上の物体と天上の物体とを同じ力学の法則によって説明しようとした人。力学の建設者の巨人。

＊彼は哲学者であったばかりでなく、解析幾何学と屈折光学の創始者であり、天文学、解剖学、水力学、航海術、建築学などに通じており、ポンプ、レンズ、日時計などの改良に関心をもつ、という多才な人だった。

＊中世の古い権威と抑圧から人間の理性の解放した偉大な思想家であったがゆえに、さまざまな迫害にあって追われ、放浪したすえにスウェーデンで亡くなった。

＊『屈折光学』『気象学』『幾何学』『宇宙論』『人間論』『方法序説』『哲学原理』など

＊ベーコンの経験や感覚を通じての認識とはタイプが違い、公理から出発して一歩一歩と論証していく合理的推理こそが科学においてもっとも重要だと考えた。

◇近代的学問の方法の開拓者

＊デカルトは、まず注意深くならなければならず、速断と偏見を避けることを強調した。それから、問題をもっともよく解くためには、事象を必要なだけの数に小部分にわけ、もっとも単純でもっとも認識しやすいものから検討をはじめて、段階をふんで複雑な問題の認識に至る理解の道筋を示した。

①明証的に真であると認めたもの以外、決して受け入れない事。（明証）
②考える問題を出来るだけ小さい部分にわける事。（分析）
③最も単純なものから始めて複雑なものに達する事。（総合）
④何も見落とさなかったか、全てを見直す事。（枚挙 / 吟味）

＊彼は、世界を全体として科学的に見ようと努力した。そして、まず疑う、ということが大事だと説いた。疑っている自分がいる、ということは疑いようがない。彼は、このように、世界を客観的に見る主体である自己（「われ」）をはっきりとらえる。「個」へのめばえ。

＊「世間（世界）という大きな書物」のなかにこそ真理があるという信念。

◇デカルトの二元論ー精神と物質の２つの実体

＊精神と物質を、たがいに相容れない、独立したものとしてとらえた。

＊それは、神学との妥協の産物でもあった。彼は、ガリレオ（1564 年～1642 年）の宗教裁判を知り、『宇宙論』などの出版を断念するが、教会からはつねに疑いをかけられていた。

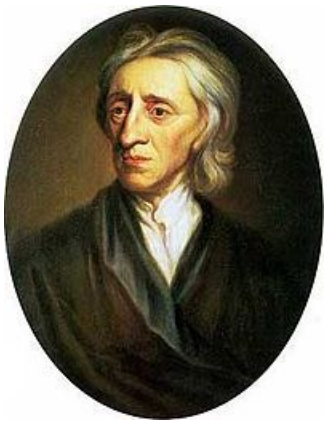
＊哲学の根本問題を浮き彫りにしたという点では、歴史的な意義。

二。ブルジョア革命の時代の哲学

①資本主義社会形成期のブルジョアジー（資本家階級）の哲学は、基本的には唯物論だった。
②封建的勢力とたたかう階級であり、資本主義的生産力の発展の推進力であったブルジョアジーはスコラ学およびその残存物とのはげしい思想闘争を行なった。
③産業科学の進歩を推進する力としての自然科学の発展に積極的な関心をもちながらその哲学を生み出していった。唯物論は必然だった。
④ところがイギリスでは名誉革命以後になると、ロックのような唯物論と観念論とのあいだを動揺する哲学者もあらわれてくる。ブルジョアジーの支配が確立されてくると、その哲学は観念論になっていく。
⑤フランスでは、18 世紀の大部分は、革命前夜の時代。ブルジョアジーが徹底的に戦闘的で、その思想的代表として、唯物論的な要素を徹底した啓蒙思想家たちが登場してくる。

1。イギリスの革命について
◇ピューリタン革命（1649 年）
＊封建貴族と教会勢力を中心とする国王派と、ブルジョアジーおよびブルジョア化した貴族を中心とした議会派のあいだで内戦。1649 年、議会派が勝利し、共和制が樹立される。しかし、1660 年に王政復古が行なわれる。
＊カルヴァン（フランスに生まれスイスで活動した宗教改革者、1509～1564 年）の“予定説”に特徴をもつ教義が、強い影響力をもった。いまでいう運命論、宿命論。神から選ばれたものによる変革。独立自営農民や平等派とよばれる最左翼。
＊しかし、革命後、ブルジョアジーはただちに反動化し、平等派を弾圧していく。
◇名誉革命（1688 年）
＊封建貴族とブルジョアジーの妥協

2。ジョン・ロック（1632 年～1704 年）



◇イギリス革命期の代表的な思想家・哲学者
＊政治思想の上では、ホッブズからひきついだ社会契約論をより衣替えし、人間の自然な発展として「市民社会」を位置づけた。
＊私有財産は労働によってつくられる
＊彼は「人権」という言葉は使っていないが、「生命・自由・財産」を人間固有の権利として、今日の人権の根本を捉えている。著書『市民政府論』は、「政治権力とはなにか」をブルジョアジーの立場からではあるが、展開している。抵抗権（革命権）という考え方も。
＊彼の思想は、のちにアメリカの独立宣言（1776 年）、フランス革命（1789 年）にさいしての指導的理念としての役割を果たしていく。
◇ロックの哲学的立場
＊唯物論と観念論との二面性

３。フランスの革命と啓蒙思想家たちについて

フランス革命は、「ブルジョアジーが完全に勝利するまで、本当にたたかいぬかれた最初のものであった」（エンゲスル『空想から科学へ』英語版への特別の序文）

◇フランスの絶対王政を徹底的に批判した人たちー啓蒙思想家といわれている
＊ヴォルテール、モンテスキュー、ディドロ、ルソーなど
＊イギリスの唯物論哲学の流れが、フランスに入り、戦闘的に発展させられる
＊激しい思想闘争が、フランス革命を思想的に準備していった

「フランスで来たるべき革命のために人びとを啓蒙した偉大な人物たちは、みずからきわめて革命的に行動した。彼らは、たとえどんな種類のものでも、まったく外部の権威を認めなかった。宗教、自然観、社会、国家制度などすべてのものに、容赦のない批判がくわえられた。･･･（略）これからのちは、迷信、不正、特権、および抑圧は、永遠の真理、永遠の正義、自然にもとづく平等、およびゆずり渡すことのできない人権によって、とってかわられなければならなかった。

われわれはいまでは知っている。この理性の王国はブルジョアジーの王国を理想化したものにすぎなかったこと、永遠の正義はブルジョア司法として実現されたこと、平等は法律のうえでのブルジョア的平等に帰着したこと、もっとも本質的な人権の一つとして宣言されたのは――ブルジョア的所有権であったこそ、理想国家、ルソーの社会契約が実現されたが、ただブルジョア的民主共和国として実現されることができたことを。このように、18 世紀の偉大な思想家たちは、すべての彼らの先輩と同様に、彼ら自身の時代が彼らにたいしてもうけた制約をのりこえることはできなかった」

（エンゲルス『空想から科学へ』）

４。ディドロ（1713 年～1784 年）―『百科全書』にかけた生涯

◇フランスの代表的な啓蒙思想家、哲学者、作家、批評家。
＊巨大な著作集『百科全書』の構想（ベーコンの学問の区分を手引きのひとつとした）と編集に、その生涯のほとんどをささげたといっていい人物。

＊彼の家は刃物製造業を営んでいた。パリに出て勉学の道をすすむ。ありとあらゆる学問を貪欲に学んでいく。
＊当時のフランス社会の矛盾は深く、経済的危機も進行し、産業革命を開始したイギリスに対抗するためには、国内の変革はさしせまった課題となっていた。
＊一方で、ルネサンス以降、新しい知識や思想が生まれ、ガリレイやニュートンによる近代力学の発展などにみらように、学問的な蓄積もされていった。しかしそれを頑強に阻もうとする古い社会制度の壁も厚く立ちはだかっていた。これを打ち破るには、新しい知識体系を総動員して立ち向かう必要がある･･･。ディドロの原動力だった。

「もしも『真理と正義にたいする熱中』――この文句を善意に解して――に、その全生涯をささげた人があったとすれば、それは、たとえばディドロのような人だった」　　（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

◇『百科全書』とは？

＊1751 に発行開始～1772 年に全巻完成。全 28 巻。

＊政治、経済、宗教、哲学、諸科学、社会生活、風俗・・・

＊執筆者には、ヴォルテール、オイラー、モンテスキュー、コンディヤック、ビュッフォン、ケネー、チェルゴー、ルソーなど、啓蒙思想家を総動員した。執筆者は 160 人に及んだ。たとえ少し立場は違っても、真実の実現と進歩を願う人びとの知的共同戦線。執筆者の中から特権階級は閉め出されたという。

＊その膨大な著作群の編集を最初から最後まで担った唯一の人物が、ディドロ。出版のために資金調達に奔走し、また自ら多数の項目を執筆もした。

＊古い権威との衝突は避けられなかった。出版それ自体がたたかいだった。『百科全書』はたびたび発売禁止や出版許可の取り消しをうけ、ディドロ自身も逮捕・監獄（102 日間）など、あらゆる弾圧を受ける。

「彼らの書きものは国境のかなたで、オランダまたはイギリスで印刷され、彼ら自身はしばしばバスティーユ監獄になげこまれる危険にされされていた」
（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

＊バスティーユ監獄･･･もともとはフランスの要塞だったが、17 世紀頃から獄舎に転用され、フランス絶対王政に反対する多くの人々が投獄され、専制支配の象徴となった。

◇『百科全書』にかけた生涯ーフランス大革命の前夜の不安定な過渡期のなかで

＊「人類の幸福に思いをめぐらそう」「人間こそ、そこから出発し、そこにいっさいをひきもどすべき唯一の目標であるのだ」

＊ディドロの不屈の情熱、その源

【補論ー現代の思想闘争にひきつけて】

＊現代日本も、革命前夜とはいえないか？　震災、原発。社会のあり方が根本から問われている時代。変革の時代にしなければならない。人間の幸福を。

＊当時のフランスとの違いは、巨大に発達したマスメディア。テレビ・新聞。ごまかし、嘘、隠蔽、迷信、すりかえ、本質そらし。

＊知ろうとすること。考えること。疑うこと。たたかうこと。

＊真実を胸の内にひっそりと秘めていても、社会は変わらない。伝える大事さ。

＊草の根からの学びあい。ネットの活用も新しい要素。

＊監獄にはぶちこまれない。けど山本太郎はドラマを降ろされた。たたかい。

＊啓蒙思想家ヴォルテール･･･軽妙なタッチで批判と風刺。文学と哲学。表現方法。

＊変革を準備する「知の力」を。

次回（６／２３）は、「ドイツ古典哲学ー哲学の豊かな発展とその限界」